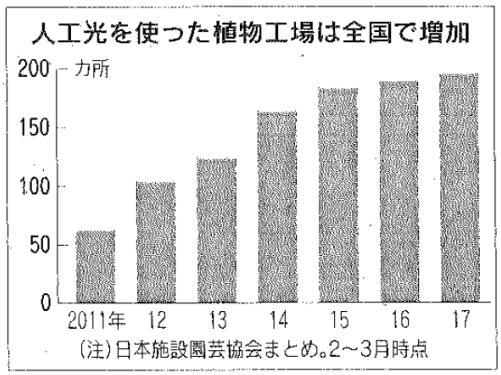
植物工場 多品種少量で

ITMファーム

採算確保へ 設備簡素化

農業法人のアイティエムファーム（ITMファーム、石川県川北町）は多品種少量の野菜を生産する植物工場の運営に乗り出す。無菌状態のコンテナ内に棚を設け、パセリやバジルなど40品種を同時に栽培する。簡素な設備で投資コストを抑えつつ、飲食店などの需要に見合った生産で価格を維持し採算を確保する。レタスなどを大量生産する従来の植物工場との差別化を狙う。

クリーンファームの植物工場システムを導入する（千葉県印西市）



川北町内の所有地にコンテナ式の栽培設備を導入し、12月から運営を始める。設備面積は約90平方㍍で、高さは3㍍程度。この中に栽培棚（ユニット）を6つ設置し、発光ダイオード（LED）の光を照射して育てる。高い機密性や断熱性を確保し、温湿度や二酸化炭素濃度も植物の生育に最適な状態に保つ。

栽培するのはパセリやバジルのほか、ケールやルッコラなど流通量が比較的少ない葉物野菜。同じ系統の野菜を同じ棚に集め、それぞれ養液の循環や流量を自動で管理する。LEDの明るさや時間も細かく調整し、約40種類の野菜を同時に栽培する。植物工場システムの開発を手掛けるクリーンファーム（千葉県印西市）と性能を確かめた。

▼植物工場　温湿度や光、水の循環を人工的に管理して野菜などの農産物を育てる施設。天候に左右されず年間を通して栽培できるほか、害虫被害の心配が少なく農薬の使用を減らせる。近年の相次ぐ天候不順で野菜の価格が乱高下していることもあり、日本施設園芸協会（東京・中央）によると、植物工場は全国で増加している。

大量の電力を使うためエネルギーコストの高さが難点。北陸では石川県志賀町や福井県高浜町など、電気料金が優遇される原発立地地域を中心に大規模な植物工場が進出している。

生産した野菜はレストランや料亭のほか、道の駅などの直売所にも出荷する計画だ。観光客でにぎわう金沢市周辺を中心に販路を開拓する。野菜の品ぞろえを確保しながら受注生産に対応。鮮度の良さをPRし、スーパーの市販価格より少し高めとなる1袋200円程度で販売する方針。

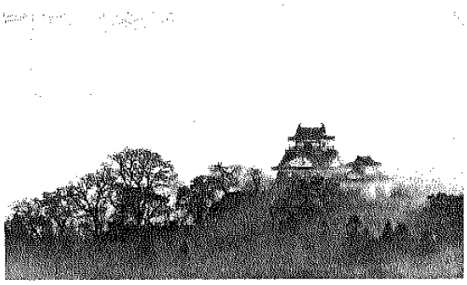
一般的な植物工場はレタス類など消費量の多い野菜を大量に生産することでコストを抑えている。ただ大規模な設備を導入するため初期投資や償却コストがかさむうえ、露地野菜が値下がりすると流通価格が下落。採算を確保できず撤退するケースもある。

コンテナ式工場の導入に要する投資額は1基当たり4千万円程度。太陽光パネルを設置し消費電力の一部を自家発電で賄い、ネックとされる電力コストも3割抑える。アイティエムファームは今後、コンテナを1年で1基のペースで増設し、将来は10基まで増やす計画だ。

同社は板金加工のアイティエムコーポレーション（石川県川北町）が2015年に設立した農業法人。現在は水田でコシヒカリを生産し飲食店などに直販し、17年6月期の売上高は約800万円。既存顧客に野菜を売り込み、コメ以外に収益源を広げる。

「天空の城」の期間限定
4宿泊施設に朝食登場

福井・大野



秋から冬は「天空の城」越前大野城を見るため多くの観光客が訪れる

福井県大野市の4つの宿泊施設は10月1日から朝食サービスを始める。市内にある越前大野城が雲海に浮かぶ「天空の城」となる可能性がある2018年4月30日までの期間限定。秋、冬を中心に写真撮影を目的とした早朝の観光客が増えるため、市が各施設に協力を求めた。

扇屋旅館、俵屋旅館、旅館ふじや、ナマケモノカフェが朝食を提供する。いずれも、城や城の撮影スポットである別の山に近い場所だ。県産食材を使った和食、イタリア料理の軽食など施設によって異なり、料金は500～1000円。前日の午後5時までの電話予約が必要となる。

同市の観光協会のホームページで各施設の紹介を始めた。市は「朝食サービスがきっかけになり、宿泊につながってほしい」と話している。